

## 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名前：石川 幸子（いしかわ さちこ）  
(2) 年齢：63 歳  
(3) 参加事業：  
1) 第 8 回「東南アジア青年の船」事業参加青年（1981 年）  
2) 第 10 回「回東南アジア青年の船」事業既参加青年会議（1983 年）  
3) 第 17 回「東南アジア青年の船」事業 ナショナル・リーダー（1990 年）  
4) 日アセアン・ユース・サミット基調講演（2015 年）  
5) 「東南アジア青年の船」事業 事前研修講話（2016 年）  
6) 「東南アジア青年の船」事業 事前研修講話（2017 年）  
(4) 職業：立命館大学国際関係学部 教授



### ■参加のきっかけ

「東南アジア青年の船」事業（以下「東ア船」という。）参加の前年、叔父が赴任していたマレーシアを訪問する機会があり、それ以来、東南アジア地域への関心が高まりました。それと相まって友人が 1979 年度の東ア船に参加したことに刺激を受け、1981 年に東京都の枠で応募しました。東南アジアの土地、文化、人々の生活を知りたいという知的好奇心が最初の動機でしたが、船上生活で多くの友人を得たことで、私自身の東南アジアに対する理解は単なる知的好奇心で終わらず、東南アジア地域で仕事をしたいと考えるようになりました。**私にとって東ア船は、「るつぽ体験」（自分の価値観・人生感が変わるような体験）であり、その後の人生の大きな基盤を形成する糧になりました。**当時の日本の国際交流といえば、アメリカ、西洋一辺倒のようなところがありましたから、そのような時代に、途上国であった東南アジア諸国へ出かけて行って現地の人と交流するということは、自分ではできない体験でした。新しい文化、宗教、言語に触れ、現地の人たちの喜びや悲しみを共有できたという点で人生観が変わるような事業であったと思います。

### ■キャリアパスやスキル向上に役立ったこと

東ア船への参加がキャリアパスとスキル向上に貢献した点は、主に以下の 3 点です。まず何といても、**異文化への「共感力」を養えたこと。**各国の友人を得ることで、彼らの立場に立つものを考える力が醸成されました。次に、個人レベルの共感力を超えて、国際社会の動きに対する理解と共感力を高めるモチベーションになったこと。第 3 に、個人的には東南アジアを拠点にキャリアを積んでいく決意ができたことです。

#### 「共感力」を持てるようになったきっかけは何でしたか。

プログラム中、周りの青年たちを観察していて、気づいたことがありました。最初は英語力のある青年たちが人気があるのですが、事業も終盤に差し掛かると、語学力はあまり関係がないのです。結局のところ、相手の立場に立つて物事を考えられる人、相手の立場を理解しようと努められる人が皆から好かれるということを学んだことです。

#### 事業参加中に参加青年同士の衝突などはありましたか。

「所有」に関する意識が参加青年によって異なることがありました。私のキャビンではなかったのですが、ある国のキャビンメイトが勝手に自分の化粧品を使ってしまうと困惑している日本青年がいました。日本人は、他人の所有物を断りなく借

用することはないと思いますが、その青年は、表に出ているものは自由に利用できるという認識のようでした。悪意があるわけではありませので、互いに話し合って折り合いをつけるしかありません。このような体験から話し合いによって問題を解決していく方法を学んでいったように思います。

## ■ 国連、JICA での勤務

東ア船のプログラム終了後、大学院修士課程を終えてからオーストラリアに留学し、その後、ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー制度（JPO）を利用して UNHCR バンコク事務所で難民保護官として勤務しました。笹川平和財団に移籍後も、バンコクを拠点として CLMV（カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム）各国の ASEAN 加盟支援に奔走しました。その後、JICA（国際協力機構）タイ事務所およびマレーシア事務所にて ASEAN 各国と日本が実施する第三国研修※1の効率化を図る年次会合を立ち上げました。2005 年に JICA 国際協力専門員として日本に戻り、タイ外務大臣から ASEAN 事務総長に就任した故スリン・ピットワン博士と共に JICA－ASEAN 連携協力プログラムを立ち上げ、JICA 側のフォーカルポイント（中心人物、中心となって働く人）として ASEAN 事務局と仕事をしました。その間、ラオス・パイロット・プログラム等を立ち上げ、ASEAN 各国に頻繁に出張していました。別途、2006 年からは、フィリピンのミンダナオ和平プロセスにも関与するようになり、マレーシアの大学と連携して和平調停ワークショップを複数回開催するなど、東南アジア地域の平和構築支援にも従事しました。これらの基盤は、人脈も含めて全て東ア船参加時に出来上がったものです。

※1 第三国研修……開発途上国が日本の支援のもと、優れた開発経験や知識・技術の移転・普及・定着等を目的に、他の途上国から人員を受け入れて実施する研修。（『2020 年版開発協力白書日本の国際協力』（外務省）から引用）

### プログラム立ち上げの際に苦労された点は何でしょうか。

ASEAN 協力に関して私たち開発のプロは、シンガポールのような国にはもはや支援は必要なく、ラオスやカンボジアのような国の底上げを優先的に行おうと考えますが、ASEAN10 各国はそうは考えていませんでした。全 10 各国で足並みをそろえたいと思っており、ASEAN 事務局、JICA、そしてラオス政府と実施する三角協力で嫌悪感を示されることもありましたが。例えば、ASEAN 統合に向けた格差是正のためにラオス政府を支援するラオス・パイロット・プログラム立ち上げの際にはミャンマーから強硬な反対に遭いました。ミャンマーは 2008 年にサイクロン「ナルギス」に襲われた際、当初海外からの緊急支援を拒否した経緯があり、国連を含む三角協力で悪い印象を持っていました。それでも何度も話し合いを重ねるうちに信頼関係ができ、お互いに折り合いをつけることができました。

## ■ 内閣府の事業でしか得られない経験

内閣府の事業と民間の交流プログラムを比較した時にまず思い当たるのは、その**スケールの違い**です。東ア船の場合、現在は ASEAN も 10 か国体制になり参加青年の数も私が参加青年であった 1981 年より随分増えていますが、2 か月近いプログラムを日本も含めて 11 各国 300 人を超える若者たちを組織して運営するのは容易ではありません。経費も含めて民間では太刀打ちできません。第 2 に、各国政府のバックアップがあればこそ、参加青年の質も確保できます。特に東南アジア各国からは、将来、国の中枢を担う人材が多く参加しており、人脈形成という観点からも秀でています。第 3 に、政府間のプログラムであればこそ、歴史の証人となるイベントへの参加も期待できます。例えば、私自身はマニラのマラカニアン宮殿でマルコス大統領のスピーチを拝聴する機会を得ました。また、NL の時にはブルネイの宮殿でハッサン・ボルキア国王に拝謁しました。これらのイベントは政府ならではのプログラムの醍醐味であり、長く記憶に残ると同時に活動のモチベーションとなるものです。

### 大規模事業だからこそ経験できたことは何でしょうか。

2 か月間というプログラムの長さが私にとっては魅力的でした。大規模事業だからこそ、2 か月という長期間にわたって実施できるのだと思います。長期間のプログラムなので、参加青年同士で過ごす時間も長くなり、一人一人のつながりがより強固になります。また、政府が実施する事業なので、参加青年の質が担保されていると思います。高い競争率を勝ち抜いて参加する青年たちですから、今後の国を背負っていくという意欲溢れる若者たちとのネットワークが構築できるのは貴重な機会です。

### ■「船」事業を継続すべき「今日的意義」とは

私が参加青年であった 1981 年当時は、現在のように世界的課題に対するディスカッションが船内活動の主要部分を占めてはいなかったし、勿論ファシリテーター等の役割を担う人材も乗船していませんでした。当時は、まだ福田ドクトリンの「心と心のふれあい」がメインテーマであり、文化紹介、クラブ活動、寄港地活動が重視されていたと思われます。当時は、まだ東南アジアに出かけていくことさえ稀な時代でした。しかし、**プログラム全てが自分のキャリアを形成する刺激剤**となったことは上記の通りです。

### 「キャリアを形成する刺激剤」は現在の若者にも必要でしょうか。

国際関係学部で教鞭をとっているため、将来、国連や国際的な舞台で働きたいという学生が多いです。学生にいつも言っているのは、若い時の「るつぼ体験」は非常に重要だということです。これはハーバード大学での研究でも明らかになっていますが、若い時に「るつぼ体験」をした人は、後年に会社の CEO や人の上に立つような地位に就く人が多いのです。他の人の置かれた状況や人々の思いを理解し、人を率いていくことが可能になるのです。例えば、国連では様々な国のスタッフと働くことになります。私がかつていた UNHCR では、難民という特殊な状況にある人々と接しますので、他の人に対する「共感力」が大いに必要とされます。「るつぼ体験」によって、世界で通用する力が身に付けられます。

### ■現在のキャリアパスに影響を与えたプログラム

寄港地活動では、その国の政府・統治の形を垣間見る機会とホームステイを中心に市井の人々の生活に触れることができることの両方が、キャリアパスやスキル向上につながっていることは間違いありません。既述のように、寄港地ごとに実施される表敬活動は、その国の統治のあり方を垣間見る絶好の機会でもあり、アカデミックな好奇心を刺激しました。1981 年のジャカルタでは、開設されたばかりの ASEAN 事務局を訪問しましたが、この経験はその後、ASEAN と仕事をするモチベーションになりました。実際、2008 年には**私自身が ASEAN 事務局内で仕事をすることになりましたが、その「根っこ」は 1981 年の経験にあることは間違いありません**。各国のホームステイは、異文化コミュニケーションの道場のようなものでした。異なる生活様式や食文化にどう自分をアジャストしていくかという課題や、言葉でコミュニケーションが難しいフォスターペアレントとのやり取りなどの課題は、私にとってはハードルの低いものでしたし、異なるものを楽しむことができました。これらの経験を通じて、自分が異文化の中で国際的に活動していく自信が芽生えました。

### 「根っこ」を構成するものには、他にもどんなことがありますか。

突きつめていくとまずは東ア船での経験が根底にあります。そこから遠心力が働いて、留学したり、国連機関で働いたりした経験があると思います。

### ■船を用いた国際交流の強みとは

船を用いた国際交流の強みは、何と言っても時間の長さや運命共同体感覚の醸成だと考えます。東ア船の場合は、

2 か月近い期間をかけて実施されるので、自分を曝け出さないと各国の参加青年と付き合いいけないことを直ぐに思い知らされました。キャビンの中で、良いことも悪いことも曝け出して折り合いをつけていく過程は、まさに「共感力」醸成の道場のようなものでした。40 年を経過した現在でも、キャビンメイトとは姉妹のような付き合いが続いているのは、この経験があるからでしょう。船上では、何があっても逃げる場所がないので運命共同体となります。1981 年の「につぼん丸」は現在の客船の何分の一の大きさ故、嵐に巻き込まれると船酔い者が続出しました。その時に助け合い、慰め合うという経験は絆を強化しました。

## ■ 事業参加時の国際的・地域的な人的交流

40 年を経た今も東ア船の友人たちとは様々な形でつながっています。彼らとの交流はいくつかのレベルに分かれます。まず、兄弟のようなレベルで付き合える友人が何人かおり、お互いの国を行き来したり、SNS でのコミュニケーションをコンスタントにしたりできる人たちです。東南アジアで長く仕事をするにあたり、彼らの存在はありがたく、**様々な場面でサポートを得ることができました。**

次のレベルは、同窓会の開催という形で、個人的に日ごろから付き合うまでの関係ではありませんが、5 年に一度ぐらいの頻度で同窓会を開催して旧交を温める友人たちがいます。これまで、シンガポールと東京で第 8 回東ア船の同窓会を開催しています。

### 「様々な場面でサポートを得られた」具体的なエピソードを教えてください。

マレーシアで 3 か月ほど仕事をした際には、キャビンメイトだった友人がまるで母親のように私の面倒をみてくれました。自宅から鍋窯一式を持ち出してきたのではないかと思うような手厚い援助でした。私が出かけるときには「マレーシアのタクシーは危ないから乗らないで」と言って、自分で車を運転して連れて行ってくれたことを覚えています。

### 事業に関する課題等があればお聞かせください。

私が参加した当時とは異なり、現在では ASEAN10 か国から 300 名もの青年が事業に参加しています。一人の人間がハンドルできる人数は 150 名程度だそうですので、少々多いのかもしれませんが、300 名を超えると、同じ船に乗っていても一部の青年としか交流できない状況になりかねません。

### 若い世代の参加者に対して、期待されていることなどありましたらお聞かせください。

“get out of the comfort zone”、現在の居心地のよい場所にいれば安心安全かもしれませんが、しかし、ぜひ、自分の知らない世界に飛び込んでみてください。全く違った景色が見えてきます。

## 石川幸子氏 (Ph. D) プロフィール

立命館大学国際関係学部教授。獨協大学非常勤講師、及びフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学アジア平和構築プログラム・ビジティング・プロフェッサー。タイ、及び香港にて国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) に勤務後、笹川平和財団にて笹川南東アジア協力基金を 7 年間担当。その後、広域企画調査員として JICA タイ事務所及びマレーシア事務所での勤務を経て、2005 年より 2021 年 3 月まで JICA 国際協力専門員として平和構築及び ASEAN 地域協力担当。2021 年 4 月より現職。